

報告番号	※甲	第	号
------	----	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 「評価する」・「評価される」の発達：
協力社会におけるゴシップの役割に着目して

氏 名 篠原 亜佐美

論 文 内 容 の 要 旨

わたしたちヒトは、血縁関係にない他者を含めた多くの人と共に協力的な社会を築いている。このような社会の中で高い協力レベルを維持するための仕組みとして、間接互惠性が挙げられる。間接互惠性の中では、他者の行動を第三者視点で評価し、他者に協力するか協力しないかを決定する、他者の行動を「評価する」行動（社会的評価）と、自分の行動を見ている第三者からの評価を気にして、自身の協力行動を調整する、他者から「評価される」行動（評判操作）の重要性が指摘されている。

第1章では、ヒト成人が実際に社会的評価や評判操作をおこなうことを示した研究を紹介し、ヒト乳幼児を対象とした社会的評価、評判操作の発達を調べた研究を概観した。他者の行動を第三者視点から評価するための認知的萌芽は生後まもなくからみられ、生後2年目以降になると、他者の行動の善悪判断を基に、協力するか否かを決定するようになる。4歳以降になると、他者に見られているときにより協力的になることが明らかになっている。これらの先行研究では、乳幼児が他者の行動を第三者視点から直接見たときの社会的評価、自分の行動を他者から直接見られているときの評判操作の発達について明らかにしている。しかし、多くの人と集団を築いているヒトの社会で協力レベルを維持するためには、「いま・ここ」にいる人に対する社会的評価、「いま・ここ」にいる人からの評判操作をおこなうだけでは不十分である。そこで本論文では、ヒトの協力社会におけるゴシップの役割に着目した。ゴシップとは、他者の評価的情報をその人がいない場で第三者と共有することを指し、ヒトはゴシップに従事することが報告されている。ゴシップのおかげで、他者の行動を直接見ずとも、他者が過去にどのような行動をしたかを効率的に知ることができる。ヒト成人は他者の行動をゴシップで聞いた後、そのゴシップのターゲットである他者に対して社会的評価をおこなう。さらに、ヒト成人は自分の行動が誰かにゴシップされる可能性のあるとき、より協力的に振る舞うことが示されている。しかしヒトがいつからゴシップを基にした社会的評価やゴシップを気にした評判操作をおこなうのか、その発達については未だ未解明である。そこで本論文では、ゴシップを基にした社会的評価、ゴシップを気にした評判操作の発達について明らかにすることを目的とした。

第2章では、子どもの評判操作について、これまでの先行研究では明らかにしきれていなかった点を解明した。これまでの先行研究からヒト幼児は他者に見られているときに協力的に振

る舞うことが明らかとなっているが、他者が存在していることが子どもの協力行動を引き出したのか、子どもが観察者から良い評価を得たいと動機づけられて協力的になったのかについては区別できていなかった。第2章では、「自分が資源を分配する相手が良い／悪い人か」を観察者が知っているかどうか（心的状態）を操作することで、6-8歳児が観察者からの評価を気にした分配行動をみせるかを検討した。子どもが観察者からの評価を気にしているのであれば、分配相手が良い／悪い人かを観察者も知っているときには良い／悪い相手への分配する資源の数に差が出るが、知らない場合には差が出ないと考えられる。その結果、観察者が分配相手の特性を知っている条件では、良い／悪い人に対する分配数に違いがみられたが、観察者が分配相手の特性を知らないときには、二者間の分配数に差はみられなかった。この結果から、6-8歳児は観察者が自分をどう評価するかを考慮したうえで、協力行動を調整していることが示唆された。

第3章と第4章では、ゴシップを基にした社会的評価の発達について明らかにした。第3章では、5歳児と7歳児にポジティブあるいはネガティブなゴシップを1度聞かせた後、そのゴシップのターゲットに対する社会的評価をおこなうかどうかを検討した。その結果、ゴシップを基にした社会的評価は5歳から7歳の間に顕在化し、なかでもネガティブなゴシップに基づく社会的評価がより早期から発達することが明らかになった。第3章では、7歳児でもポジティブなゴシップを基にした社会的評価をおこなう傾向がみられたが、ネガティブなゴシップと比べてその傾向は弱かった。その理由として、社会的評価をおこなうのに1度きりのポジティブなゴシップでは不十分な可能性が考えられる。そこで、第4章では、複数のポジティブなゴシップを基にした社会的評価について、7-8歳児を対象に検討をおこなった。その際、1人の人から複数回ゴシップを聞くだけで十分なのか、複数人からゴシップを聞くことが重要なのかについても検討した。その結果、7-8歳児は複数人からポジティブなゴシップを聞いた後には社会的評価をおこなったが、1人から複数回ポジティブなゴシップを聞いた後には社会的評価をおこなわなかった。この結果から、ゴシップに基づく社会的評価には、様々な人からゴシップを聞くことが重要であることが示唆される。これはヒトの社会の成り立ちに即した結果であるといえる。

第5章では、ゴシップを気にした評判操作の発達について明らかにすることを目的とした。4歳児と8歳児を対象として、自分の行動が他者にゴシップされる可能性があるとき、子どもが協力的に振る舞うかどうかを検討した。参加児の行動が、(1)参加児と同じ集団に属している子どもにゴシップされる可能性があるとき、(2)参加児と違う集団に属している子どもにゴシップされる可能性があるとき、(3)ゴシップされる可能性を示唆しないとき、の3条件間で参加児の分配行動が異なるかどうかを調べた。もし子どもが将来ゴシップを聞いた人からの互惠性を期待して評判操作をおこなうのであれば、自分と同集団の子どもにゴシップされる可能性があるときに最も協力的になると予測した。その結果、8歳児は他者にゴシップされる可能性のある2つの条件において、より多くの資源を分配していたが、4歳児はそうではなかった。この結果から、ゴシップを気にした評判操作は8歳頃に出現する可能性が示唆された。

第6章では、ネガティブなゴシップの提供者を子どもが良いと評価するか悪いと評価するか、7-8歳児を対象に検討をおこなった。子どもがゴシップを受け取る立場のとき、ゴシップのターゲットに対しては社会的評価をおこなうが、ゴシップの提供者に対しても評価を下しているかを明らかにすることが目的であった。ネガティブなゴシップの提供者を協力的なパートナーとして選択するか、ネガティブなゴシップの提供者に対して資源を分配するかどうかを検討した。その結果、7-8歳児はネガティブなゴシップの提供者を協力的なパートナーとして選択せず、ま

た、ネガティブなゴシップの提供者に対して資源を多く分配しなかった。このことから、7-8 歳児はネガティブなゴシップの提供者のことを「悪い人」と評価している可能性が示唆された。

第7章ではこれまでの一連の研究結果をまとめ、ゴシップを基にした社会的評価、ゴシップを気にした評判操作の発達について議論した。また、これらの行動が、社会的学習・心の理論・メタ認知の発達とどう関連していくかという視点から考察をおこなった。最後に、ヒトの協力社会における「評価する」「評価される」の発達について議論をした。「評価する」行動の基盤は発達初期からみられ、幼児期になると他者の行動の善悪判断を基に、自分の協力行動を決定している。こういった「評価する」経験により、評価する立場、評価される立場をメタ的に理解した結果、「評価される」行動が発達していくモデルを提起した。また、年齢を重ねるにつれ、家庭という最小単位の集団から幼稚園・小学校といった大きな集団に所属するようになることで、他者の行動についての言語的なやりとりの重要性を学習していくと考えられる。集団に属する経験と子どもの認知発達が基盤となり、ゴシップを基にした社会的評価やゴシップを気にした評判操作が発達していく可能性を議論した。